

日ソ中立条約と日米交渉始まる

平成17年5月14日・高根台公民館

六十年前の敗戦の日、私は中学三年生でしたが、勤労働員先の軍需工場で玉音放送を聞いて、正直云って全てが真っ白になったような気持ちでした。二、三日してからだったでしょうが、近くの銭湯へ出掛けて行って、煌々と電灯の明かりがついているのを見て、初めて「あゝ戦争は終わったんだ」と実感したものです。そのとき脱衣場でも洗い場でも、大人たちが口々に「ソ連が裏切ったから負けたんだ。この悔しさは孫子の代まで語り継がねば」、「そうだ、そうだ」とみんなで云い合っていたのを、今でも鮮明に覚えております。

日本がソ連との間に日ソ中立条約を結んだのは昭和十六年四月ですが、有効期間は五年。ですから条約は、翌年の二十一年四月まで生きていたのです。ところがソ連は敗戦一週間前の八月八日、これを一方的に破って日本に宣戦布告、満州から一斉に攻め込んできました。ドイツ、イタリアが降伏して、云ってみれば日本だけで世界中を相手に戦っているような時です。多くの国民は、中立を約束しているソ連が、まさか後ろから攻めてくるとは思ってもいなかったし、それだけに弱り目に付け込まれ、「国際信義の上からも絶対に許せない裏切りだ」と怒ったのです。

ワラにもすがる思いは、日本政府も同じでした。四月五日にソ連が「中立条約を延長しない」と通告してきた時も、条約期限があと一年残っていることに一縷の望みをかけ、そのソ連を仲介にした和平工作に懸命になっていたのです。実際はどうだったのでしょうか。その年の二月、クリミア半島の保養地ヤルタにルースベルト、チャーチル、スターリンの米英ソ三首脳が集まり、ヤルタ会談が開かれています。ソ連は樺太南部と千島列島領有を条件に、ドイツ降伏後二、三か月で対日参戦をする。こう云う秘密協定を結んでいたのです。抜き打ちではなく、中立条約延長せずの意思表示だけはおこうというわけですが、何とも空しい和平工作でしたし、情勢音痴もいいところでした。

この日ソ中立条約の立役者は、何と云っても第二次近衛文麿内閣の外務大臣松岡洋右です。十五年九月に締結された日独伊三国同盟にしても、ほとんど松岡一人のペースで進められましたし、近衛内閣の外交は終始、「万事オレに任せろ、オレの云うことは間違ったことがない」。こう云う強気で自信家の松岡一人によって引つ掻き回され、引きずられたと云ってもいいでしょう。そして、それがもたらした結果は、日本の運命を左右するほど重大なものだったのです。

松岡がドイツ外相リッペントロープの招きに応じて、シベリア鉄道經由でベルリン、ローマ訪問の旅に出たのは、昭和十六年三月十二日のことでした。しかし松岡の独伊訪問は「看板」であつて、本当の狙いはソ連との間に政治協定を結ぶ。これが隠された目的だったので。松岡にとつて三国同盟は、日ソ国交調整のためのワン・ステップであり、ソ連を同盟に入れることで米英とのバランスが成り立つ。松岡はこの勢力均衡の上に、初めて行き詰まっている日米関係が打開出来ると考えていました。ですからこの松岡訪欧は、四国同盟の力により最終的には対米和平へ持っていくとうと云う、いわば「松岡外交総仕上げ」の足場固めだったので。

ドイツも三国同盟締結の際、「日ソ国交調整に正直な仲買人となる」。こう云つて、仲介を約束していましたが、松岡も大いに当てにしていました。しかし一向に進展する様子がありません。それどころか、独ソ不可侵条約を結んで一見良好に見られていた独ソ関係は、この頃には急速に悪化して去了。ルーマニアの石油をはじめとするバルカンの対立、北欧でもぎくしゃくした関係が続いていました。ソ連のモロトフ首相をベルリンに招いて話し合つても決着がつかず、ヒットラーは十五年暮れには「十六年五月十五日までに作戦準備を完了するよう」、バルバロッサ作戦と呼ばれるソ連攻撃命令を出して行つたのです。松岡はそんなことは全く知らずに、「四国同盟」の夢を描いて訪欧の旅に出たわけですが、出発の時点ですでに松岡構想は根幹から崩れていたことになりました。

シベリア鉄道での松岡は、腹案を練りながら随員を相手に談論風発、とにかくお喋りな人でした。アメリカの駐日大使グルーは、「松岡と話すと、その九五％を彼が喋る」と本に書いていますが、随員たちが松岡につけたあだ名が「一方言就寝居士」。夜中になつて酒を飲んでも眠れません。話相手が必要になり、一万語喋つてやつと眠りにつくと云う意味なんだそうですが、まあ誰だつて敬遠しません。酒に強い陸海軍の軍人や新聞記者がもつぱら聞き役で、松岡に随行した同盟通信編集局次長の岡村二一、戦後東京タイムズを創立して社長になつた岡村は、こんな話をしています。松岡は「ヒットラーとムツソリーニは付けたら」だと云うのです。「三国同盟はもう出来ちゃつたんだから、何もオレが行くことはない。ただモスクワへ行くのに寄らんわけにもいかんから、モスクワの方は帰りに寄つた格好にする。目的は君、ソ連との政治協定だよ」。松岡は列車内にソ連の盗聴器が仕掛けてあるのを承知で、自分の話がソ連に入るのを計算して、盛んに気炎をあげていたので。

松岡はまずスターリンに会つてから、ドイツへ行くことにしました。ヒットラーやムツソリーニと会見する際、スターリンとさして話が出来たと云うことは、松岡の立場を強める背景になります。最終目的はソ連との政治協定にあるのだから、まず行きにスターリンに会つて顔を見せておき、訪独後の本格的な交渉の伏

線を引いておこうと云うわけです。秘書官の加瀬俊一さん、昨年百歳の高齢で亡くなられましたが、加瀬さんが松岡に命じられて、駐ソ大使の建川美次、満州事変の時の参謀本部作戦部長で陸軍中将の建川に、「スターリンと会うから会見を申し込め」。こう電報を打つと、建川からは「会うはずがない。断られて恥をかくだから止めた方がよい」と返電してきました。当時のスターリンはクレムリンの奥深く隠れていて、外交的な場面には顔を出さないと云うのが定評でした。ところが松岡は、「建川のバカが、この松岡なら必ず会うんだ」と云って、「本大臣の訓令を即刻執行相成りたし」と高飛車に命令したのです。

果たしてモスクワでは、モロトフ首相が松岡と会談中に、「どうです、スターリン書記長と会いませんか」と云います。そしてモロトフが電話すると、待つほどもなくスターリンが現われたのです。松岡とすれば顔見せだけで十分、日ソ関係の具体的な問題には立ち入らずにベルリンへ向かいました。松岡、スターリンに会う」のニュースは、たちまち電波に乗って世界を駆け巡りました。スターリンには、松岡の腹を探ると同時に、独ソ関係が悪化している時、日ソ間の親密さを世界に印象づける狙いがあったのでしよう。

三月二十六日、ベルリンに着いた松岡の歓迎は、「盟邦日本の外相が来た」と云うので熱狂的なものでした。盛装した少年少女が駅のホールを埋め尽くし、「ハイル、ハイル」と万歳の大合唱です。松岡一行がオープン・カーでパレードをする時、三十万市民が手に手に日の丸の小旗を振って歓迎したのです。宿舎では松岡が出入りするたびに護衛兵が捧げ銃をし、ドーンと太鼓を鳴らします。松岡はすっかり気に入って、大変なご機嫌だったそうです。

ヒットラーと二回、リッベントロープとは三回会談しましたが、ドイツ側が常に要求したのが、イギリスの極東の要塞シンガポールを攻撃でした。ヒットラーがすでに出していた作戦命令には、「急速にイギリスを屈伏させ、アメリカ参戦の機会を失わせるため、バルバロッサ作戦と呼応して日本にシンガポールを攻略させる」。こう明記されていたのです。リッベントロープも戦後のニユールンベルク裁判で、「ドイツはソ連と開戦する前に、何とかして日本にシンガポールを攻略させ、それを機会にイギリスと講和したかったのだ」と証言しています。ヒットラーとしても、東と西の二正面戦争はやりたくありません。本能寺はもともとソ連であり、日本がシンガポールを攻撃してくれば、イギリスとは有利な条件で講和出来ると見ていたのです。

しかし日本の方も、ドイツがそう要求してくるだろうと云うことは十分に予測していました。うっかりシンガポール攻略の約束でもしようものなら、アメリカとの戦争に巻き込まれる恐れがあります。ですから松岡訪欧の際の政府訓令でも「武力行使について、日本の自主性を拘束するような約束はするな」とクギを刺していたのです。それでも三国同盟を結んだ時、「日本はシンガポールを攻撃すべ

きだ」と強硬に主張した松岡です。参謀総長の杉山元も心配だったのでしよう。東京駅で松岡見送りの際、「シンガポールはダメだよ。いいね、ロシアを頼んだぞ」と念を押していますが、この一言こそ、松岡訪欧の使命と軍部が何を期待していたかを、端的に物語るものでした。

日露戦争以来ソ連は常に日本の仮想敵国であり、満州に膨大な関東軍を展開させたのも、その脅威に備えるためでした。しかも一年半前、ノモンハンで死闘を繰り広げたばかりの陸軍が、ここへきて急にソ連との国交調整に熱心になったのは、南へ進む、南進論との兼ね合いからです。日米通商条約が廃棄され、アメリカが石油や屑鉄の輸出許可制に踏み切ると、日本はこれを蘭印など南方に求めようとした。しかし、日本が南進政策を進めると、英米と衝突の恐れが出てきます。それには日本の背後、つまりソ連との関係をよくしておかなければダメだと、軍部を中心に日ソ国交調整に対する強い要請が出てきたのです。

ヒットラーは、松岡に熱弁を振るいました。「イギリスが無力で、アメリカの戦備が整っていない今こそ、神が日本に恵んだ好機ではないか。日本がシンガポールを攻撃すれば、イギリスの崩壊は確実だ」。しかし松岡は、「個人的には同感だが、政府を代表して約束する立場にない」と、はっきりした回答を避けました。松岡の関心はもちろん、日ソ国交調整にドイツが約束通り動いてくれるかどうかです。ところがリッペントロープの答えは「モスクワに長居は無用だ」とか、「ソ連とは余り立ち入った話し合ひはしない方がよい」とか、極めて熱意のないものだったのです。そして、すでに決定済みのソ連攻撃計画には一言も触れませんでした。

実は海軍総司令官のレーダー提督は、「いっそ松岡にソ連攻撃計画を知らせたら、日本は北方の脅威を感じずに安心して南進するのではないか」。ヒットラーに再三進言したと云われますが、ヒットラーの鶴の一声で「絶対極秘」が命令されたのです。ドイツと云う国は、何でもヒットラーの一言で決まってしまうのです。秘書官の加瀬さんの話では、松岡歓迎午餐会で、ナチスの領袖がヒットラーの一挙手一投足から片時も目を離さない。ヒットラーがナイフを取れば、みんな一斉にナイフを持ち、フォークを持ってば一様にフォークを取る。「まるで催眠術にかかったようだった」と云っています。イタリアのムッソリーニにも一切内緒で、独ソ戦が始まってから深夜電話で叩き起こされ、「ヒットラーのやり方は、いつもこうなんだ」と怒ったそうです。

松岡もベルリンに入ってから、独ソ関係が予想以上に悪くなっていることには気付いていました。再びドイツ大使になった大島浩から、「あるいは独ソ戦があるかも知れない」と報告を受けていましたし、松岡がベルリンに招集したヨーロツパの大使・公使会議でも、「ドイツ軍が東へ移動中」と緊迫した情勢が指摘されていました。ところが松岡は一人で喋って、そうした情報には全く耳を貸さな

つたと云うのです。ここに自信家で、何でも「オレがオレが」の松岡外交の限界がありました。もし独ソが衝突すれば、松岡の四国同盟構想は根底から崩れるだけではなく、味方にしようと思っていたソ連を、否応なしに米英の陣営に回すことになってしまうのです。

ヒットラーは、明言こそしなかったものの、それなりのサインは出していました。「独ソ関係は目下のところ平常だ」と云いながら、「万一の際は、二、三か月でソ連を抹殺する自信がある」と豪語します。松岡が帰国の挨拶をした時も、「天皇に報告される際は、独ソ衝突の可能性が絶無でないことに留意して頂きたい」と念を押し、通訳はこの言葉をゆっくり二回も繰り返したと云います。ちよつと冷静に考えれば、ここで「おかしい」と思つて当然なのです。なぜ、もつと情報を集め、真剣な検討を加えなかつたのか。松岡は、随員たちが独ソ戦の可能性に触れても、一言のもとに「ノー」と否定したと云います。「独ソ戦はあるにしても、もつと先だ」と云うのです。ヒットラーの言葉は、日本にシンガポール攻撃を促すためのブラフだと受け取つてしまい、こうした情報を東京にも一切知らせませんでした。

しかも松岡は、独ソ異変を告げる場面に居合わせていたのです。ヒットラーと初めて会談した三月二十七日、会談は予定時間を過ぎて三時間にも及びました。伝令兵が引つきりなしに入ってきて、会談が再三中断されたためです。実は二日前ドイツの圧力で、日独伊三国同盟に加盟したばかりのユーゴスラビアで、「反独クーデターが勃発した」と云う第一報だったので。後ろで糸を引いていたのはソ連でした。新政府が出来ると、ソ連がすぐ不可侵条約を結んだものですから怒つたのはヒットラーです。「刑罰作戦」と名付けられたドイツ軍のユーゴ進撃は四月六日から始まり、連続三日間の爆撃で首都ベオグラードは廃墟です。市民の犠牲は一万七千を数え、ユーゴは十七日に降伏しました。

しかし結果から見れば、この軍事行動で貴重な二週間を空費したことが、ドイツ敗戦の大きな一因になるのです。五月二十五日に予定していた対ソ開戦日が、六月二十二日と一か月もずれ込んだうえ、雨季が例年より早くやってきました。悪天候で機械化部隊が動けなくなつたところへ、十月には早くも冬將軍の到来です。ドイツ軍は、ヒットラーが「二、三か月で片付ける」と豪語していた通り、夏の装備のままです。冬の用意をしていなかったドイツ軍の進撃は鈍り、ソ連軍の反撃を呼ぶことになったのです。

松岡は、このユーゴ進撃をどう思つたのでしょうか。列車でモスクワへ向かう途中、ラジオの特別放送で知り、加瀬さんに「おい、これでモスクワとの交渉は出来たよ」と云つたそうです。独ソ関係がよくて、ドイツの斡旋で日ソ国交調整をしようと思つていたのが、独ソの反目で舞台が変わつてしまいました。しかし今度はソ連がドイツを警戒して、日本に対しては下手に出てくるに違いない。日

ソ関係の打開は、独ソ友好の結果としてではなく、独ソ反目の副産物として出来るだろう。変わった舞台で、自然に振り付けが出来たと云うわけです。いかにも松岡らしい読みですが、双方が勢力範囲として争っている所での衝突が、独ソ全面衝突に発展する危険性を考えなかったのか。変わった舞台が世界情勢にどんな変化をもたらすのか。そこまで読まなければいけないのに、余りにも自分の構想にこだわり過ぎました。大局を見る目に欠けていたと云わざるを得ません。

モロトフとの交渉は四月七日から始まりましたが、松岡はまず不可侵条約を提案しました。ところがモロトフは、代償を要求します。「ドイツとの不可侵条約でも、ソ連は失った土地、バルト諸国やルーマニアの一部を回復した。だから日本と不可侵条約を結ぶとなれば、千島の一つも貰わなければならない。しかし、それは日本が承知しないだろうから、中立条約にしよう」。こう云うのですが、それに対して代償を要求しました。極東情勢で日本が有利になる、つまり日本は安心して支那事変を解決出来るのだから、日本が北樺太に持っている石油や石炭の利権を放棄すべきだと、こう云うのです。九日の第二回交渉で松岡が不可侵条約を撤回し、中立条約を即時無条件で結ぼうと提案しても、モロトフは頑として利権解消を譲りません。モロトフは「ロシアという国は、領土は渡さん、利権は離さん」と云うのです。まあ北方領土問題がなかなか解決しないのも、これがロシアと云う国の伝統的な体質なんでしょう。

ここから虚々実々の心理戦争が始まります。松岡が「出来なきや出来ないでいいですよ。私はこのまま帰りますから」と諦めたような態度を示すと、モロトフも慌てました。「もう一度話し合いたい」と云います。松岡としてもこのままモスクワを去ったのでは、諸外国から侮られます。帰国の列車を延ばし、時間を稼ぐ必要がありました。松岡の意識は、モロトフと話をしているも常にアメリカに向けられていました。松岡とすれば、日独伊にソ連を加え、その力をバックにアメリカとのテーブルにつきたいのです。その夜、モロトフ首相主催の晩餐会が終わると、松岡は夜行列車でレニングラードへ向かいました。レニングラードは松岡が三十年前、二等書記官時代に新婚生活を送った思い出の土地です。「ロメオとジュリエット」のバレエをゆっくり楽しみましたが、その間にスターリンの気持ちが悪くのを期待したのです。

しかし十一日の交渉でも、モロトフは依然として利権の同時処理を主張して平線です。すると松岡は、もうこんな話に未練はないと云わんばかりに、サツサと交渉を打ち切ってしまいました。加瀬さんとソ連の護衛官を連れてキャバレーへ飲みに出掛けたのですが、そこへ日本大使館から電話がかかってきたのです。「スターリンが会いたいと云っているから、至急大使館に戻ってほしい」。しかし松岡は返事をしません。この辺が松岡一流の計算なのでしょう。スターリンが動いたのならもう問題はない。「放っておけ。今夜は帰って寝るから」と、そのまま

宿舎に帰ってしまったんだそうです。

独ソ関係が緊迫している時です。松岡の日ソ中立条約提案は、スターリンにとつても「魚心に水心」だったはずで、それでいて、まずモロトフに強硬な主張をさせたのは、松岡の真意を測っていたからでした。日本は本当にソ連と事を構えたくないのか、それとも中立条約提案は戦争をカムフラージュするものなのか。松岡がドイツでソ連攻撃の密約をしてきたのではないかと、とも疑っていました。そしてもう一つわからないのが、ヒットラーの腹です。ドイツ軍はユーゴを席捲するとギリシアに攻め込み、バルカン全部がドイツの勢力下になってしまえば、な形勢でした。しかもドイツ軍は独ソ国境に続々と集結しつつあり、ルーズベルトやチャーチルからも、「ドイツはソ連攻撃を計画している」との警告が届いていました。スターリンはそれでも半信半疑だったのです。米英は絶えず独ソ間を引き離そうと、離間を試みています。うっかり乗っては危険だと、とりあえずはヒットラーに下手に出て、ご機嫌を取り結ぶことにしていました。

そこへ松岡の来訪です。もしヒットラーが本当にソ連攻撃を計画しているのなら、松岡に圧力をかけて日ソ交渉をやめさせるはずだ。ドイツにとって同盟国である日本が、やがて戦う相手と中立条約を結ぶなんて、とんでもない話ではないか。松岡の中立条約提案は、ヒットラーと打ち合わせずみのことだと解釈したのも無理はありません。スターリンはさんざん迷った末、「独ソ戦はしばらくはなし」と結論づけたのです。ここにスターリンの大きな誤算がありました。

当時のスターリンの打算は、出来るだけ戦争に巻き込まれないように、その圏外に立つ。交戦国が血みどろの抗争に疲れ果てた時に、強大な武力を背景にして戦局收拾に指導的発言権を確保することにあつたのです。昭和十四年八月にドイツと不可侵条約を結んだ時も、英仏の軍事使節団がモスクワへやって来て、英仏ソの同盟を働き掛けている最中でした。スターリンが結局ドイツを選んだのは、英仏と結べば即刻参戦の恐れが出てくるが、ドイツと話し合いをつけておけば、しばらくは戦争の成り行きを静観出来る。こう考えたからでした。

日ソ中立条約についても、同じような打算がスターリンの動機になっていたのです。スターリンはソ連のスパイ・ゾルゲ、ドイツの新聞特派員の肩書きで来日しドイツ大使館に自由に入りに入っていたゾルゲの報告で、ヒットラーが松岡にシンガポール攻撃を強く迫ったことを知っていました。スターリンの考えでは、日本が南進して米英と衝突してくれば、これほど都合なことはありません。ドイツと不可侵条約を結んで、ドイツを英仏との戦争に駆り立てた。今度は日本に中立条約を与えて米英と戦わせれば、ソ連は安泰になるとの計算でした。

こうして十二日の夕方、第四回交渉となったのですが、ソ連側の主役はスターリンでした。松岡がまず世界地図を広げて、「あなたのとこは、こんなに邪魔なほど広いじゃありませんか。どうです、いつそのこと北樺太を日本に譲りません

か」。こう切り出すと、スターリンは笑って「そんなことをしたら、これですよ」と、両手を首に当てて絞首刑の真似をして見せます。松岡が「この際、大局的に地に立って電撃外交をやり、全世界をびつくりさせようじゃありませんか」と云うと、スターリンも共鳴し、交渉は急転直下、ものの十数分で妥結したのです。中立条約は三条の簡単なもので、日ソ両国の相互不可侵と、日ソいずれか一方が第三国と戦争になった場合は、他方は中立を守る。有効期間は五年で、期間満了の一年前に廃棄通告をしなければ、さらに五年間自動的に延長されることになっていました。モロトフが最後まで粘った北樺太の利権問題は、「日本が数か月以内に利権解消に努力する」。こう云う英文の手紙を提出することで解決したのです。

ソ連は満了一年前の二十年四月に廃棄通告はしたものの、まだ条約期限が八月も残っていたのに、それを破って対日戦に踏み切ったわけです。確かに国際条約を一方的に破った重大な裏切りでしたが、背信と云う点では、残念ながら日本も同罪と云っていいでしょう。独ソ戦が勃発すると「関特演」、「関東軍特別大演習」と称して八十万人の大動員を行い、チャンスさえあれば北進しようとしていたのです。北樺太の利権解消の約束にしても、具体的に動き出したのは日本の敗色が濃くなり、ソ連に和平の仲介を求めた戦争末期のことでした。

調印式は十三日午後三時から行なわれましたが、松岡が「天皇陛下に乾杯」を提議すると、スターリンは「それじゃシャンパンだ」と云って、見事に一杯あおりまです。それから「ウオッカだ」となって、スターリンが「君、約束したことは守れ」と云えば、松岡は「日本には昔から、ウソを云ったら首をやる」と云う諺がある」と応酬、二人ともすつかり酔っ払って上機嫌でした。国際列車の出発は午後五時です。加瀬さんが時間を気にして何度か腕時計をのぞくと、それを見たスターリンはつかつかと机まで行って、電話で何か命じたかと思うと一同を見渡し「諸君、国際列車は出発を一時間延ばしました。存分に飲んで下さい」。加瀬さんは「国際列車まで遅らせてしまう、見事な独裁者ぶりだった」と云っています。

千鳥足で駅に着いた松岡が見送りの外交団と挨拶をしていると、異様なざわめきがあります。スターリンがモロトフと肩を組みながら、これまたすつかり酔っ払って、それも線路を横切ってやって来たのです。スターリンが駅頭に外国使臣を見送りにくるなんてことは、古今未曾有のことでした。二人はパツと抱き合い、スターリンが「これでヨーロッパで恐ろしいことはなくなつた」と云えば、松岡もすぐ「いや、ヨーロッパどころか、世界で怖いものはないじゃないか」。最後は互いに肩をポンポン叩き合い、「俺はアジア人だ、お前もアジア人だ。アジア人だ、アジア人だ」と頼ずりです。松岡はもう得意満面、スターリンの策略にまんまと乗ったのも知らずに、「これで大構想は成った」の思いだったのでしよう。

実は松岡は、モスクワでその布石を打っていたのです。アメリカの駐ソ大使ス

タインハートと、行きと帰りに三回も極秘会談を重ねていたのです。スタインハートはルーズベルト大統領の信任厚い大使で、モスクワへ赴任の途中、東京に立ち寄った際にグルー大使から紹介されて旧知の間柄でした。松岡はソ連をすませた後は、アメリカへ乗り込んでルーズベルトと直接交渉し、日米間の問題を一挙に解決するハラでした。その糸口をグルーではなく、スタインハートに求めたのです。東京では軍部の口出しが邪魔でしたし、グルーの行動も憲兵の監視下にあり、松岡自身、自由に動けない状況だったからです。

松岡はスタインハートに、「欧州戦争の帰趨は明白だから、アメリカは干渉しない方が賢明だ。日本はアメリカと戦争をする気はないし、日米戦争は中国や極東の共産化を意味する」。こう力説して、大統領宛ての手紙を託しました。それは、アメリカが日本の南方諸国との貿易を保証し、日本が中国でアメリカの権益を侵害しているようなことがあれば、支那事変の終結次第賠償する。東亜における日本の新秩序の思想は、征服しない、圧迫しない、搾取しないことだ。こういった主に貿易問題の内容ですが、松岡は大統領と直接会談することを希望し、支那事変解決のためにその場に蒋介石が来てもよい、と付け加えました。そしてスタインハートも、大統領に直接電報することを約束したのです。

この間イギリスのチャーチル首相も松岡に秘密メッセージを届けてきました。これは本当は、松岡がベルリンに大使・公使会議を招集した際、のちに外相となる重光葵大使がロンドンから持参する予定のものでした。ところが交戦中のためベルリン行きはとても無理とあつて、チャーチルが「リスボンまで特別機を出すから、中立国のスイスで松岡と落ち合うことにしたらどうか」。チャーチルはここまで熱意を見せたのですが、松岡の方は「モスクワへ急いでいるのに、スイスなんかで道草を食っている暇はない」と断ってしまったのです。

スタインハートは、加瀬さんがハーバード同窓と云うことで特別に親しくしてくれましたが、スタインハートからの電話でアメリカ大使館に駆け付けると「クリップス・イギリス大使が松岡に会いたがっている。至急手配してくれ」と云います。チャーチルのメッセージを極秘に手渡したいが、クリップスと建川大使は犬猿の仲であり、ソ連の秘密警察の目も避けたい、「何かいい方法はないか」と云うのです。松岡はその晩、モロトフの招待で芸術座にチエホフの芝居を見に行くことになっていました。第一幕が終わる寸前、トイレに行くふりをして特別喫茶室でクリップスと秘かに落ち合い、メッセージを受け取ったのだそうです。

内容は、制空権、制海権のないドイツのイギリス本土上陸は難しくなっていること、イギリス空軍の力はドイツ空軍を上回っていることなど、イギリスの実力を指摘した上で、「英米の鉄鋼生産量は八千七百万トあり、もしドイツが敗れた場合、七百万トの日本は一国だけで戦争遂行が可能だろうか。このことは、日本が英米の二大海軍国と良好な関係を保つことによって、悲劇を避け得ること

を示していないだろうか」。鉄鋼ひとつとっても、日本の十二倍以上あるのだぞと、日本の自重を促したものでした。勿論そこには、何としても日本のシンガポール攻撃をやめさせたいと云う、チャーチルの思惑もあつたでしょうが、英独戦の実情を冷静に分析し、判断する。その絶好のチャンスでもあつたのです。しかし重光が、「松岡外交はドイツの勝利を信じ、これに一切を賭けたもの」と云つてゐるように、「わが道を行く」松岡には全く通じませんでした。

シベリア鉄道で帰国を急ぐ松岡は、もう世界外交の立役者として、檜舞台に立つた思いだったのでしよう。満州里へ着く前の晩、岡村二一がピールの相手をしてゐると、「お前、ちよつと手帳に六月二十六日のところへ二重丸をつけておけ」と云います。「何ですか」と聞くと、「その日にオレは重慶へ行く」と云うのです。「そんな、とても無理だ」と云うと、松岡は南京に飛んで蒋介石の飛行機に迎えにこさせる。蒋介石に「日本はもうソ連と仲良くしちゃつたんだから、今度は君とアメリカと仲良くする」。こう話して、チャイナ・クリッパーと云う重慶とワシントンとを結ぶ航空路を利用して二人でワシントンへ飛び、ルーズベルトと三者会谈をやる。岡村に「お前も連れていつてやる」と云うのです。

松岡は、「支那事變の解決条件は、満州国さえ認めさせればいいんだ」と云つたそうです。ただ万里長城と満州国の間を中立状態にする。そうしないと、また喧嘩が始まるし、南方からも全部兵を引く。ルーズベルトへのお土産は大きくしなといけないから、北部仏印に進駐している部隊を増員して、南部仏印へ出る姿勢を見せる。それをきれいに引き揚げさせれば、ルーズベルトの顔も立つと云うわけです。松岡外交の特徴は、常に強く出ようとしたことでした。陸軍随員の永井八津次大佐は、松岡から「これからソ連と交渉するのに、関東軍に満ソ国境で事件を起こさせろ」。こう云われて、びっくりしたと話しています。国際問題をパワー・ゲームとして処理しようとしたところに、大きな間違いがありました。

列車が一步満州へ入ると、駅という駅ではかつて松岡が総裁を務めた満鉄社員が総出で出迎え、万歳、万歳の大合唱です。満州里では「至急松岡と話したい」と云う近衛首相の伝言が待つていました。そして四月二十日に大連に着くと、近衛から「アメリカから重大な提案がきたから、至急帰国してほしい」との電話が入つたのです。松岡は受話器を置くと、傍にいた加瀬さんに晴れ晴れとした笑顔で、「もうきたか。さあ、次はアメリカへ飛ぶぞ」と云つたそうです。スタインハートを通じてルーズベルトに申し入れた提案が、早くも実つたのだと思つたのです。スタインハートからも「大統領の反応は上々」の電報を受け取つていましたから、松岡が「わが事成れり」と喜んだのも無理はありません。

しかし日ソ中立条約の調印は、松岡にとつて得意の絶頂であつたと同時に、失意の始まりでもありました。松岡がベルリン、モスクワで日ソ中立条約に奔走している時、ワシントン、東京では別の熱いドラマが展開されていたのです。

11

松岡が帰国を急いでいた頃、四月十七日の午後から十八日朝にかけて、アメリカの野村吉三郎大使から何の前触れもなく、重要な電報が続々と入電してしました。七項目からなる「日米諒解案」なるものの全文に続いて、「これで交渉を進めたい」と政府の訓令を求めてきたのです。その諒解案と云うのは、一言で云えば、満州国も認めよう、金も貸そう、三国同盟もそのままでもいいと、まるで棚からボタモチみたいない話なのです。

しかも日本政府は、この諒解案を「アメリカ政府の提案だ」と受け取ってしまったのです。ここにまず大きな誤解がありました。野村大使は、諒解案成立のいきさつをこう電報しています。「かねてから内面工作を行い、米政府側の賛意を打診していたところ、ハル國務長官も大体これに異義がないことを確かめたので、自分も内密に関与して種々折衝した結果、この案が出来た」。そして「國務長官から、これによって交渉を進めてよいと、政府の訓令を得てほしいとの申し出があった。長官は、話が進んだ後で東京から否認されるようなことがあれば、米政府の立場は困難になる、と云っている」。こう前置きして、「この諒解案で交渉を進めるよう」政府の回訓を切望したのです。

確かに野村は、これが「アメリカ提案だ」とは一言も云ってはいないのですが、「東京から否認されれば、米政府の立場は困難になる」など、とりようによってはそうともとれる表現です。そして、野村の電報と並行して入ってきた駐米陸軍武官の電報が、「諒解案はルーズベルトの同意を得ている」とか、「日本側の意思表示あり次第、その大綱は一、二日中に決定すること確実なり」とか、日本側にかにもアメリカ政府の提案だと錯覚させるような内容だったのです。

外務次官の大橋忠一は事の重大さにびっくりして、とりあえず閣議中の近衛首相を呼び出し、第一報を耳に入れました。近衛もこの頃には、三国同盟が当初の目的に反してアメリカ抑制に失敗し、かえって日米対立を深めていることに気が付いていました。それだけに大変な喜びようです。暗号電報の解読を待つて十八日夜八時から大本営政府連絡会議が開かれましたが、近衛は諒解案を「米國提案だ」と説明し、陸軍大臣の東条英機をはじめ陸海軍の首脳も、それこそ「飛び付いた」と云った、はしやぎぶりだったと云います。

日米交渉最大の問題点は、アメリカ側にとつては日独伊三国同盟であり、日本側にとつては支那事変の解決でした。ところが諒解案では、日本の三国同盟による参戦義務について、「ドイツが現に欧州戦争に参入していない国、つまりアメリカによって積極的に攻撃された場合に於いてのみ発動する」としてあります。三国同盟の条約には、「積極的」とか「於いてのみ」といった言葉はありません。あえてこの言葉を挿入することで、日本としては三国同盟はそのままにするが、実質的には同盟の骨抜きを意思表示し、アメリカもそれを認めたことになり

ます。アメリカの欧州戦争に対する態度についても、「もつぱらアメリカの福祉と安全防衛の見地から考慮される」。こう声明することになっていました。

支那事変については、「和平条件を米国大統領が容認し、かつ日本政府が保障したときは、大統領は蒋介石政権に対して和平の勧告をする」としています。その和平条件とは、支那の独立、日支間の協定に基づく日本軍の支那領土撤退、支那領土の非併合、非賠償、門戸開放方針の復活、蒋介石政権と汪兆銘政権の合流などでしたが、満州国の承認まで入っていたのです。その上、日米両国が必要とする物資を相手国が持っている場合は、相手国がこの確保を保証し、アメリカは日本に対して金クレジットを供給する。日本がほしい南方の資源、石油やゴム、錫、ニッケルなどの生産、獲得については、アメリカの協力、支持が得られるとし、ハワイ・ホノルルでの近衛・ルーズベルトの首脳会談も提唱していました。

「うま過ぎる話だ」といった声も出ましたが、泥沼に陥っている支那事変を解決しながら日米戦争を回避するとなれば、これ以上の妙策は思いつきません。参謀次長も「少し三国同盟にヒビが入っても止むを得ない」といった意見でしたし、すぐにも「原則的賛成」と返電しようとの声が大勢を占めました。しかし大橋外務次官は反対です。「松岡外相がもうそこまで帰ってきているのだから、帰国まで回訓は待つべきだ」と主張し、まずは松岡の帰国を急がせることになったのです。大橋の話では、閣議ではいつも発言らしい発言もせず、ポカンと閣僚たちの熱弁を聞いているだけの近衛が、この時だけは「私が軍艦に乗って大連まで行き、艦上で松岡君と協議したらどうかかな」と、大変な意気込みだったそうです。

松岡の帰国が悪天候のため遅れ、東条陸相差し回しの飛行機で立川飛行場に降り立ったのは、四月二十二日午後三時でした。マスコミは「外交史上、画期的な成果」と讃えましたし、朝日新聞も「国際連盟脱退の日、古い世界秩序に爆弾を投じて凜凜しく帰ってきた松岡は、きょうは新しい世界秩序の手を握り交わして颯爽と帰ってきたのだ」。こんな手放しの表現で松岡を迎えたように、松岡自身もあわよくば、近衛に代わって首相になるくらいの積もりで帰ってきたのです。

近衛は、そんな松岡の気質をよく知っていました。日頃物ぐさな近衛が「松岡君は感情の強い人だから、諒解案に政府、大本営が一致したということを初めに言い出す人物によつては、その時の気分でどう出るかわからない。私が出向いて帰りの自動車の中で話せば、案外スラスラ行くかも知れない」。こう云つてわざわざ立川まで出迎えに出たのですが、ここから話が狂つてきました。松岡が「皇居遥拝をする」と言い出したため、そうしたスタンドプレーの嫌いな近衛は、諒解案の説明を大橋次官に任せて、別の車に乗ってしまったのです。これには伏線があつて、松岡はモスクワでケガをしたとかで、右手に包帯を巻いていました。そこで左手で握手したのですが、左手の握手は絶交を意味します。しかも松岡が「近衛さん、あなたのようにはいかん。ヒットラーもムッソリーニも違う」などと

云ったものですから、近衛はひどく不快感を持ったと云います。実につまらないことにこだわったものですが、内閣書記官長の富田健治は、「近衛が松岡外相と同じ車に乗らなかつた瞬間こそ、日本の歴史的運命の瞬間であつた」と書いています。近衛は「外相にはあなたしかいない」と云つて松岡を迎え、日ソ中立条約の調印に「松岡と云う人はエイブルな人だ、有能な人だ」と称賛していたのに、二人が離反していく別れ道でした。

大橋から説明を聞いた松岡は、自分の工作したスタインハートの筋でないと思つて激怒しました。外交は自分一人でやる積もりの松岡です。「このわしをさしおいて、外務大臣の職務権限をどう考えているんだ。留守中の自分を出し抜いた策謀だ」と息巻いたそうです。夜、連絡会議が開かれ、みんな首を長くして待っているのに、松岡の方は外相官邸の歓迎会で気炎をあげています。午後九時半、富田書記官長を迎えに出してやつとやつてきたのですが、ロレッツも回らないくらい酔つていたと云います。しかも「ヒットラーさん、チアーノさん」と呼びながら、チアーノはイタリアの外相ですが、盛んにヨーロッパ訪問の自慢話を吹きまくりません。たまりかねた近衛が日米諒解案を持ち出すと、松岡は激昂して「アメリカにだまされるな」と怒鳴ります。そして「この米国案に軽率にOKを出すことには不賛成だ。第一に、このような閣取引をすることは友邦ドイツの信頼にもとる。第二に、米国案は悪意七分、善意三分である。この問題は重要であるから、二週間か一、二か月ほど考えさせてもらいたい」。こう云つて、旅の疲れを理由にサツサと帰つてしまつたのです。

それからの松岡は病氣と称して、千駄ヶ谷の自宅に引き籠もつたまま閣議にも出てきません。肝心の外交場面で、首相と外相の間に意思の疎通がなかつた。これが、まず「すぐ応ずる」という、外交に必要なタイミングを逃す結果になつたのです。松岡も最終目的が本当に日米和平だつたのなら、そんなケチな面子にこだわるべきではなかつたし、松岡の個人的な欠陥がモロに出してしまいました。しかし、この日米諒解案の問題点をいち早く見抜いていたのは、やはり外交では百戦錬磨の松岡だつたかも知れません。松岡が大橋次官に「英文の原案を見せろ」と云うと、「そんなものはない」と云います。もしアメリカ提案なら、まず英文があつて、それを翻訳した日本文となるはずです。松岡は云つたそうです。「これはヨコのものタテにしたものではない」、つまり英文を日本文にしたのではなく、日本人の作文だと云うのです。

この日米交渉ほど、米国提案だと思ひ込んだ誤解に始まり、誤解に終始した奇妙な外交交渉はなかつたでしょう。それもこれも、交渉のキツカケが日米の民間人による素人外交から始まり、双方に策士が介在したことにあつたのです。ニューヨーク州メリノールに、アメリカでは少数派のカトリック教徒が設立した海外伝道教会の本部がありました。所在地にちなんで「メリノール派」と呼ばれました

が、東アジアの布教に熱心で、京都の教区長が代わると云うことで、昭和十五年十一月二十五日、会長のウォルシユ司教と事務総長のドラウト神父が来日したのです。しかし交代式出席はあくまで名目であつて、聖職者として年々悪化している日米関係を何とか改善したいと、日本の政財界や軍部など各界要人と話し合うことが目的でした。二人は、元ブラジル大使の沢田節蔵がニューヨーク総領事時代に親しくしていた人の紹介状を持って、沢田を訪ねて来ました。沢田も「こんな大事な外交問題に、なぜ神父が……」と思ひながらも、二人の熱意に打たれて松岡外相などに紹介したのですが、松岡の方は外交を素人に頼る気持ちなんか全くありませんから、相手にしません。

ところが、二人の神父が持っていたもう一通の紹介状が、日米政府間に思いもかけないパイプをつなぐことになるのです。それは産業組合中央金庫理事の井川忠雄に宛てた、クーン・レープ商会重役ストロークの紹介状でした。ストロークはフーバー元大統領の秘書を務め、戦後は原子力委員長をしたほどの大物財界人です。またクーン・レープ商会と云うのは、日露戦争の時、日本の外債募集に積極的に協力してくれた、ニューヨークの有力なユダヤ系金融機関です。

日露戦争は、外国で日本公債を募集して戦費を調達しないことには、戦えない戦争でした。日銀副総裁の高橋是清、大蔵大臣になり二・二六事件で暗殺された高橋がロンドンで外債募集に悪戦苦闘している時、高橋を助けてくれたのがクーン・レープ商会会長のヤコブ・シフだったのです。全米ユダヤ人協会会長のシフが高橋に全面協力を申し出たのは、帝政ロシアのユダヤ人迫害をやめさせるには、日本を助けてロシア帝国を倒す以外に道はないと思つたからでした。まさに日本の「命の恩人」でしたが、高橋も大いに徳として、外貨支払いに当たる横浜正金銀行の取引をクーン・レープ商会とさせるようにしたのです。

井川は大正九年から昭和二年まで、大蔵省のニューヨーク駐在財務官をしていた関係で、ストロークとは格別に親い仲でした。近衛とは一高同窓であり、近衛の政策ブレーンである昭和研究会の中心メンバーでしたから、二人の神父はいち早く、近衛との連絡路を探り当てるのが出来たわけです。しかも神父たちは、ホワイトハウスにも有力な伝手を持っていました。ウォーカー郵政長官です。全米カトリック協会の財務委員としてルーズベルト大統領三選の際に選挙参謀を務め、カトリック信者の票をまとめた功績で郵政長官のポストを与えられた人です。

こうして日米民間人と近衛、ルーズベルトの間に、なまじつか連絡の回路が成立してしまつたことが、日米関係を一層紛糾させることになるのです。二人の神父は、井川の紹介で陸軍軍務局長の武藤章少将、軍事課長の岩畔豪雄大佐とも会見して、陸軍側の意向を確かめて帰国しましたが、井川宛てに「大統領訪問の結果、有望進捗中、展開が期待される」。こう電報してきたのです。井川が近衛に報告すると、この辺が近衛と云う人のいい加減なところでしょう。「アメリカ通

の井川にやらせて、成り行きを見るか」と、松岡に相談もしないでゴー・サインを出してしまつたのです。二重外交の芽生えです。

満州事変以来、日本の国家意志は常に分裂してきました。陸軍が政治、外交の主導権を握つたためでしたが、これから難問の日米交渉をするという時に、それを外務大臣が知らないなんてことは、外国ではとても考えられないことです。当時発行が容易でなかつたパスポートは、岩畔大佐が外務省に圧力をかけ、井川は無給の外務省囑託という事で二月十三日アメリカに向かいました。本人は「人柱になる決意だつた」と云っていますが、この日米交渉をまとめて政界のよいポストにつきたいと、野心満々だつたようです。井川の資格は私的なものだつたのに、「自分は外相代理だ」とか、「日本政府を代表している」とか。こんなことを触れ回り、ドラウトやウォーカーと日米諒解案の第一次原案とも云うべき、試案づくりにとりかかつたのです。

駐米大使になつた海軍大将の野村吉三郎が、ルーズベルトに信任状を奉呈したのが、翌日の二月十四日です。ルーズベルトは「自分は日本の友であり、アドミラル野村はアメリカの友だ。お互いに十分率直に話し合える」と笑顔で迎えました。が、果たして野村が大使として適任だつたのかどうか。提督としては有能であり人格者であつても、外交手腕となると大きな疑問符が付きまします。松岡は外相になると、イギリスの重光大使を除いて在外交官を一新してしまいました。その際「ここは、あなたのような大物で、アメリカに顔のきく人の出番だ」と云つて、盛んに野村を口説いたのです。野村が大正五年、駐米海軍武官としてワシントンに赴任して以来、海軍次官だつたルーズベルトと極めて親しい仲だつたのに目を付けたわけです。松岡自身は外交は全て自分でやる積もりでしたから、野村は露払い、いい環境作りをしてくれればいくらいの気持ちだつたのでしよう。野村は阿部内閣の外相時代、陸軍の横槍でさんざん苦い目にあつたこともあつて、再三辞退しました。しかし結局引き受けたのは、海軍部内からも強く勧められたこと、そして悪化している日米関係を打開するには「やはり自分が行つて」と、心中期するところがあつたのだと思います。

野村は「自分は海軍出身だから海軍のことはわかるが、陸軍のことはわからない。これから日米交渉を進めるのに、誰か補佐役出してくれ」。こう陸軍に要請し、派遣されてきたのが軍事課長の岩畔大佐だつたのです。軍政上のことは全部軍事課長に集約されますから、歴代課長には切れ者中の切れ者が配置されます。岩畔は陸軍でも指折りのやり手でした。大体が「三国同盟を絶対結べ」と、陸軍の先頭に立つて松岡外相に圧力をかけたのは、武藤軍務局長と岩畔軍事課長だつたのです。それが今度は「日米交渉は自分でまとめてやる」と張り切つてアメリカへ向かつたわけですが、同じような性格の武藤とは折り合いがよくありません。持て余した陸軍大臣の東条が、野村の要請に体よく放り出したと云うのが真

相だったようです。

しかしこれで井川、岩畔と、日米諒解案の影の主役が揃うことになりました。野村が井川を信用したのは、ウォーカー郵政長官の斡旋と井川の手引きで、三月八日にハル國務長官と秘かに会談出来たことであつたと云われます。野村も何としても対米関係を打開したい一心でしたから、積極的に動いてくれる井川に心を許したのでしょう。三月下旬、アメリカに着いた岩畔は井川から第一次案を見せられ、「日本が三国同盟を離脱する」とあつたものですから、「これではとても陸軍が承知しない」と、三国同盟離脱などの項目を削ってしまいました。岩畔が日米諒解案を「あれはドラウト、井川、それに私の三人のテッチ上げだ」。こう云っているように、一次案はアメリカのペースで作られ、二次案は岩畔のペース、日本にとつてかなり有利な文面を並べたものだったので、ところが野村は、岩畔は陸軍を代表して来ていると思つていますから、岩畔を信用します。井川らの作業に岩畔が加わつたことで、日本としては協定案づくりに初めて公的な性格を与えたこととなります。

問題は、アメリカがいわば私的な諒解案を、どうして公式ルートに乗せることを承知したのかです。二人の神父の工作自体、「アメリカの謀略だつたのじゃなにか」と云う見方があります。しかし、どうでしょう。日本でのキリスト教弾圧が激しくなつてきている時です。神父たちには、日米和平を調停することで、日本での布教に有利な地位を築きたい。またウォーカー郵政長官には、カトリック教徒の信頼をつないでおきたい。こんな思惑があつたのではないのでしょうか。ハル國務長官はウォーカーから詳細を聞いていましたが、二次案が多くの特で一次案より後退したことには不満だつたと云います。ハルは回想録に「成功の見込みは二十分の一、または五十分の一、あるいは百分の一もないものと判断した」と書いています。それでいてハルが諒解案を無下に斥けなかつたのは、ドイツの脅威の方が日本よりもはるかに大きいと見ていたからです。ドイツ打倒がアメリカにとつて第一目標であり、対日政策としては、出来れば外交により日本を三国同盟から離脱させることだとしていたのです。

最終案には野村も加わり、アメリカ側も若干の修正をしましたが、何とか日米正面衝突を避ける道を見つけようとした、「苦心の作」だつたと云えるでしょう。四月十六日ハルは野村を招くと、「これまでの話し合いは個人的関係で、いわば民間の会談だつたが、今後は大使と國務長官の非公式会談に移し、この諒解案を基礎として交渉を進めたい。ついでには日本政府の意向を得てほしい」と申し出たのです。ただ肝心なことは、「諒解案」となつていても、決して外交的に了解がついたものではなかつたことです。双方の言い分をそれぞれ盛り、互いに不満な部分については今後の交渉の過程で修正していこうと云う、あくまでも叩き台に過ぎないのです。野村にその認識があつたのかどうか。私が野村の大使として

の資質を疑うのは、この点にあります。

しかもハルはその際、交渉に入る前提として、重大な発言をしていたのです。「アメリカ政府が国際関係の基礎として宣言している諸原則を、採用する意思があるかどうか」と云うのです。それは領土保全と主権の尊重、内政不干渉、機会均等、太平洋の現状維持の四原則で、いわゆる「ハル四原則」と呼ばれるものです。もし厳密に適用すれば、満州事変から支那事変に至る日本の歩みは、真つ向から否定されることになります。ハルは「日本が米国の政策に同調する決心をせよ。そうでなければ交渉の可能性はない。その覚悟があるのか」と、最初にクギを刺していたのです。

ハルは野村の英語力について、「マージナル」という言葉を使つて、「ひどい英語なので、自分の云う問題点を理解したのか不安だった」と云っています。ところがテキサスの判事出身のハルの方も、ひどいテキサスなまり。互いに相手の発言を理解するのに苦労したようです。野村の関心は、アメリカが諒解案にどの程度合意出来るのかでした。野村の質問にハルは、「幾つかはすぐ合意出来る。修正すべき点も幾つか目につくし、当方から修正したい点もある」と答え、こう付け加えたそうです。「いずれにせよ、日本政府が本当に心から政策転換しようとしておられるなら、公正かつ満足すべき解決策が見出だし得ないはずがない」。しかし結果として野村は、この「ハル四原則」を東京に全く打電しなかったのです。それほど重要なことではないと思つたのか、それともこんなことを伝えたら交渉にならない。ここはとにかく交渉に入ることだ。そう思つてわざと隠したのか。野村が四原則を日本政府に伝えたのは、ずっと遅れて五月八日の電報でした。それも電文は、「米国側が執拗に四原則を主張したので、相互に原則論に深入りしないことを提案して、これを抑えた」。これでは「四原則が交渉の出発点だ」と云うハルの真意を正確に伝えたとは、とても云えません。

この日米交渉について、日本側関係者の間には、アメリカの謀略説が根強く残っています。外務次官の大橋は戦後の手記に、「彼らアメリカの謀略家が、太平洋の裏口から米国を戦争に引きずり込むため、当初からいささかの誠意も持たずに会議を引き延ばした」、当時参謀本部作戰部長の田中新一少将も、「単なる謀略に過ぎなかつたという観測も、陸海軍側の注文による時間稼ぎだつたという噂も、いずれも無根ではなかつたと思われるふしがある」と書いています。確かに国務省顧問のホーレンベックはハルを上回る対日強硬論者で、「日米諒解案は絶対に受け入れられない。ただ日本は、会談の不成功がハッキリするまでは行動に出ないから、それを材料として日本を会談に巻き込め」。つまり諒解案をエサに日本を適当にあやしておけ、といった意見書を出していました。しかし、ハルにその魂胆があつたとしても、ハルが四原則を交渉の前提条件として出している以上は、ハルの騙しでなく、それを伝えなかつた野村の騙し、諒解案がいかに米

提案だと思わせるように画策した、岩畔らの騙しだったのではないでしょうか。

軍務局長の武藤はさすがに、諒解案の背後に岩畔がいることを見抜いていました。諒解案を見て、「岩畔はこんなことをやっていいのかね。あれほど各方面を怒鳴り回して三国同盟締結を図りながら、今度はアメリカへ行つて手の平を返したように日米関係の調整だ。百八十度の転換だ。この諒解案は岩畔の作文だよ。余りに策が多過ぎる」と、苦々しげだったといえます。武藤は陸軍首脳会議で「日独枢軸分裂の謀略じゃないか」と疑念を指摘しましたが、結局陸軍が「原則賛成」に同意したのは「ダメでもともと」。「仮にアメリカの謀略でも構わない。日中和平の橋渡しをしてくれれば、日本は万歳。アメリカがやらなかったら、いつでもご破算にすればよい」。こういう意見が大勢を占めたからなのです。

岩畔はいつまでも政府の回訓がこないのを、松岡の自宅に電話しました。盗聴を警戒して、「先日お送りした魚の干物は、早く料理をしないと腐る恐れがあります」。こう云つて回答を急がせると、松岡は云つたそうです。「野村に君から云つてもらいたいのが、余りアメリカさんに早惚れして色目を使うとなア」。岩畔は「松岡が諒解案に冷淡なのがハッキリわかった」と云つていますが、その松岡が政府大本営連絡会議にやつと出てきたのは、五月三日のことでした。松岡はその席で三国同盟堅持と対米強硬姿勢を強調し、諒解案をつぶしにかかったのです。アメリカが中国から手を引くこと、三国同盟に抵触しないこと、ドイツに対する信義を破らぬこと。極めて高姿勢な「松岡三原則」を承認させたのですが、「ハル四原則」には真つ向から対立するものです。近衛や東条陸相が承知したのは、交渉に入るにはとにかく回答を出すべきだと思つたのか。いずれにしろこういう席になると、松岡の毒気に当てられてしまつて、松岡の一人舞台になつてしまふのです。

さしあたり日米中立条約を提案させ反応を見ることが、ハルに対するオーラル・ステートメント、口上書を出すことが決まりました。ところがその口上書と云うのが、「日本は三国条約に基づき、同盟国独伊の地位を少しでも毀損するようなことは絶対にしない決心である」と、岩畔が「こんなものを渡したら、ぶち壊しだ」と呻くような内容だったのです。野村が七日、中立条約を提案すると、ハルは「それは別問題だ」と取り合いません。続いて口上書について、「内容に不適当なことが書いてあるが、お渡ししますか」と打診すると、ハルは「大使にその権限がおりなら、そつちにとつておいてもらつて結構だ」と云います。ハルはとつとにその内容を知つていたのです。アメリカは「マジック」と名付けた暗号解読により、日本の外交暗号はほとんど解読していました。ハルは「これらは、日本政府が我々と平和会議を行いながら、一方では侵略計画を進めていることを示していた。これらの傍受電報を見ていると、自分の言い分と反対の証言を行なう証人を見ているような気がした」。こう回想していますが、松岡のハラのうちまで

見透かされていたのでは、松岡外交は初めから勝負にならなかつたわけです。

松岡修正案は五月十二日に提示されました。ハルが「この文書からは、ほとんどかすかな希望の光も射してこなかつた」。こう云っているように、松岡は諒解案の妥協点を全て否定してしまつたのです。三国同盟の日本の参戦義務について「積極的に攻撃された時のみ」とした、いわば苦心の緩和策から、支那事変の和平条件、南方への武力中止、そして諒解案最大の目玉であるハワイの日米首脳会談まで削つてしまいました。「トップ会談が不調に終わった時のリスクを考える」と、非常に危険だ」と云うのが松岡の言い分ですが、後で日本の方から首脳会談を提唱することになるのですから、拙劣極まりない愚かなやり方でした。ハルはルーズベルトと話し合い、「対日譲歩せず」。そして「たとえほんのかすかでも、日本を枢軸同盟から切り離す可能性は求めなければならない」という方針を決めたのです。

アメリカが松岡修正案に対して正式回答してきたのは、六月二十一日でした。翌日の独ソ戦突入を読み切つてのことです。ハルは米英の情報網から「二十二日確実」の情報を得ていましたから、「独ソ戦という新事態になつても、アメリカの態度は変わらないんだ」。この姿勢を示すため、あえて前日を選んだのです。しかし何時に開戦するか、時間まではわかりません。国務省顧問のホーンベックは「ベルリン時間で攻撃するはずだ。二十二日午前零時以降だから、ワシントンとベルリンには六時間の時差があり、我々は二十一日午後六時に渡せばよい」と主張し、米国案の提示は二十一日午後零時半に行なわれたのです。

独ソ戦については六月に詳しくお話ししますが、このアメリカの正確な読みに対して、日本はどうだったのでしょうか。大島ドイツ大使は六月三日、ヒットラーに呼び出されて「独ソ戦必至」と告げられました。大島もここまで言明している以上はと、「独ソ戦は短時日のうちに決行するものと判断せらる」と急電したのですが、松岡は信じようとしません。それを信ずることで、自分の外交構想が崩れるのを恐れたのでしよう。六日の連絡会議でも首をかしげながら、「開戦には大義名分を必要とするから、まず条件を出し、その後で開戦するだろう」と主張し、天皇にも「協定成立六分、開戦四分」と上奏したのです。陸軍大臣の東条も侍従武官からの問い合わせに、「それほど切迫しているとは思えない」と答えています。参謀本部もまた「ドイツがイギリス、ソ連と二正面作戦の愚を繰り返すはずがない」。こう思つていたので、情報を突き合わせて総合判断する。その能力にも組織にも欠けていたのが、戦争中の日本の最大の欠陥でした。

米国案の内容はこういうものでした。アメリカが参戦する場合は自衛のためであり、アメリカがドイツから挑発されて参戦した場合には、日本は参戦しない確認を求めてきたのです。いわば三国同盟の骨抜きです。支那事変についても、松岡が削つてしまつた和平条件を復活させ、「支那領土より日本の武力を撤退すべ

きこと」と明記されていきました。また太平洋地域での武力行使の禁止、つまり日本は南方に対して軍を動かしてはならないとしたのです。しかも一緒に出されたハルの口上書が松岡を怒らせました。松岡の名前こそ出していいもの、「日本の指導者の中には、ドイツとその征服政策に抜き差しならない誓約を与えている者がいる。こうした者がいては、現在の提案が実質的結果を収めるような期待はないのではないか」と、「松岡忌避」を意味するものでした。松岡は怒り心頭です。「野村がこんな無礼千万な文書を取り次ぐとは不屈き千万。内閣改造の要求を黙って聞いているとは驚きいった次第だ」。野村に当たり散らしましたが、近衛もまた日米交渉を進めるには松岡更迭以外にはないと、七月十六日内閣総辞職を決行し松岡を罷免するのです。

松岡外交挫折の原因は、第一に自分に対する過信でした。自分以外に正しいものはないと、他人の言葉に耳を傾けなかつたし、しかも狹量でした。天下国家の大事より、己れの面子にこだわり過ぎました。第二に、ドイツとアメリカの評価を誤ったことです。ドイツ電撃作戦の華々しさに目を奪われたのは、何も松岡一人ではありませんでしたが、独ソ戦が始まってもおドイツ必勝を信じ、アメリカは強く出れば引くと判断したことでした。

ドイツ軍三百万は六月二十二日午前三時十五分、バルト海から黒海に至る千六百^キの戦線にわたって、一斉にソ連侵攻を開始しました。東京では午前十時十五分、ワシントン時間二十一日夜九時十五分でした。日米交渉はこの段階で空中分解したと云えるのですが、もし日米諒解案をもとに交渉を進めていたら、どうだったのでしょうか。日本にはそもそも米國提案と錯覚した誤解がありましたし、三国同盟にしる支那事変にしる、双方の主張には大きな隔たりがありました。容易でなかつたことは確かでしょう。ただ国際情勢は激動していました。もし松岡の妨害がなく、日本が交渉のテーブルについていたら、その直後に独ソ戦が勃発するわけです。ドイツは同盟国日本にほめかしはしたものの、正式通告はなかつたし、「日ソ国交調整に努力する」と云う、三国同盟締結の際の約束も守っていないのです。日本は「約束と違ふ」と、三国同盟から離脱出来たのです。なぜ、しなかつたのか。ここでも、ドイツ勝利を信じてしまったからです。アメリカとしても最初のうちドイツ軍は破竹の勢いでしたから、ドイツ勝利の最悪事態を考えれば、あるいは日本に対して妥協を図ったのかも知れないのです。わずかだったとはいえ、日米戦争回避のチャンスのみすみす逃す結果になったのは、何とも残念なことでした。